

# 行事保育の反省

(その三)

子どもたちは何にも

理解していません



清水 エミ子

## 文化の日

「オーイ、あしたはりんじの日曜日だぞ、一コ(一日)来ると本も  
のの日曜日なんだぞ」

「バーカ、日曜日は一回ずつですよ」

「そんなら、日ようじゃないお休みの日じゃないの」

「わすれちゃったけど、何とかの日だよ、お母ちゃん、お姉ちゃん  
に朝おしえてたよ」

この会話は、文化の日の前日、たけし君が登園して来るなり、朝のあいさつがわりに室の中の数人になげかけた、ことばのやりとりです。

私は室の中で、この会話を、こだわりなく聞き流しました。「子どもなりのうまい表現をする、なるほど」と、よろこびすら感じていました。しかしその後で、何とも言えぬ不安と心配が、おしよせてくるのを全身に感じたのです。

何回かおくり出した子どもたち(卒業した子ども)は、文化の日を、この子どもたちのような、不たしかな理解しかできずに卒業してしまつたのではないか、そして私は、この日本の年中行事をどうあつかってきたか、と反省しながらまだ、先ほどの会話のよいんが室の中にのこっている中で遊び廻る子どもたちをながめながら、昨年・一昨年の文化の日のあつかいを振り返ってみました。そしてそれはずかしさが、体をこわばらせ顔を赤くほてらせるのでした。

朝大切な時間をさいたり、おべんどうの後とか帰る間ぎわに、子どもを集め、教師である私達は、

「みなさん、明日は何の日か知っていますか」

ときもえらそうに発問するのです。すると子どもたちは、スズメの学校の子スズメのように、一せいに口を開いて、「おやすみ」「日曜日」とはき出します。

たまに、朝、母親から教えこまれて来た、子どもがいると、「ぶ

んかの日でおやすみ」と言います。すると先生はずかさず、

「そうですね、文化の日ってどんな日か、知っていますか」とたたくみかけるのです。子どもたちは、はじめたように、

「日よう日みたいな日、お休みする日」

「わからないけど、幼稚園に来ない」と口々にどなりまします。ここまできると先生はあわてて、子どもたちを静し、

「はい、わかりました。お休みですね、どうしてお休みするのかしら？」とこりずに、かさねます。

ここまできると子どもたちは疲れたようにこまったように、しおれて、だまりこんでしまいます。

そこで先生は、一いき吸いこんで「文化の日といつてね……」

と、とっておきの、しいれたばかりの知えをしぼって、とうとうと話します。ことばは、子どもにわかることばなのですが、子どもたちは、ただ何となく聞き、ことばとしてだけ、わかって帰っていくのです。(何回かふくしょうさせられた、文化の日ということばだけをおぼえてわすれないようにと、いらぬ神経をつかって)

子どもの帰った後、先生方は室をそうじしながら、「○○ちゃん文化の日を日よう日だって言ったのよ」などと話し合います。する中には、「アッ！いけない、子どもたちと○○ごっこに熱中して時間もなくなったし忘れちゃって、あしたの休み(文化の日)の話し、しなかった」とあわてる若い先生もでてくるしまつです。忘れないまでも、「何て話してよいか、一晚考えたけど、わからなくて

こまっちゃった。おとなに話すのならいいけど、それじゃわからないし……」とこぼしているのです。

そこで今日こそは、子ども達の実態をしつかりつかみ、正しい文化の日のあつかいをしなくてはと考え、朝の集合をまちながらカレンダーを黒板のまん中に出したのです。(昨日当番が、十月の頁をめくったばかりなので、子どもたちはふしぎそうに私の顔を見ていました。)

「今日は何日かしら？」と子どもたちに問いかけると、

「ににち」「ふつか」「もくようび」

「あしたは？」

「みっかだよ」

「このカレンダーのどこかわかるかしら」と言うと、

「いっとう上の日ようじやない赤い字のところ」

と言うのです。私は三日のところを指さし、

「どうして日曜じゃないのに三日は赤い字で書いてあるのかしらね」と皆の顔を見まわしました。すると、朝の、たけし君が、

「りんじの日曜のしるしでしょ」と答えました。そして、

「おやすみのしるし——」

「会社も幼稚園も疲れるからやすみなさいってゆう日じゃないの」「しらない、わかんなーい」と言うのです。そこで私も、

「どうしてなのかな、何の日なのかな」と考えこんでみせました。

すると、直司君が、「先生、そのカレンダーに何とかって、書いてあるはずだよ」と言いました。字の読める光枝ちゃんに、「読んでよ」とわざとたのむと、「かん字だから、「の」しかわからな  
い」と席にもどりがけるとそれを聞いて、

「子どもによめる子ども用のカレンダー作ればいいのに」とだれかが、つぶやいていました。私が「ぶんかの日」とよみました。

するととっぜん、朝、「何かの日だよ」と言っていたはじめ君が「そうそう文化の日」と手をうって立ちあがったのです。

### 〔子どもの理解〕

「文化の日って、どんな日かなあー」と言うのと、

おやすみ——

日ようび——

りんじの日よう日

なにかの記念日

しらない、わかんない

(この記録は園の十周年記念があり、他の先生方に調査していただけませんでしたので、私の学級の調査だけにとどまりました。) 40名いる子どもたちから、たったこれだけの答えしか聞けなかったのです。答えない子どもたちは、わからないのです。

でも私は、しかたがない、文化の日は、国の(おとなの社会の)

行事で、子どもの日とか誕生日(本誌60巻11月号参照)のように直接

子どもに関係のある行事でないのだから、(初めて耳にし経験するおとなの行事なのだから)と自分に言いきかせ、あきらめてみたのです。が、大きくなればわかる、まだ五歳では無理だ、とほって置いてよいのでしょうか？

「社会の一員としてみとめられている幼児は、幼児なりに理解されなくてはならないのではないのでしょうか、いいえ、幼児にこそ、正しく国の祝日を理解させ、立派なおとな、日本人になる心がまえの基礎を育ててはいけないのではないか、それが幼児教育のはたす役割だと言っても過言ではないと思うのです。

### 〔おとなの理解〕

四日の朝の話し合いは(子どもの報告)

・くん章をもらう日だって。

・えらい人を、天皇陛下がほめる日だって。

(この時どんなえらい人を？ と聞いたが「しらない」としか言いませんでした。)

・日本のお父さんがいい人にごほうびのおめんじょうあげる式をする日なんだって。

・兵たいのくんしょうみたいのもらう日。

・いいこと考えたり、作ったりした人にごほうびをあげるの。

・年とってたくさんはたらいた人におめんじょうとくんしょうあげるんだってき。

(おとなはやや正しく文化の日を理解しているようです。これは四月から何回かの行事のたびに子どもが聞くので、母親も答えを用意しているようになった表われも加わっているようです。)

この発表の後、今までの行事の時にはみられなかった、発言がありました。

それは、皆の発表をじっと聞いていたやすお君が、

「先生、どうして、くん章もらわない人や子どもも、お休みしちゃうの」とふしぎそうに私に聞いたことです。

私が答えにつまんで、やすお君の顔を見ました。すると、みるる君が、

「くん章やおめんじょ、もろう人は、いっぱい働いて、くたびれたからお休みするんでしょ、その人だけお休みになればいいのにね」

と言うと、けい子ちゃんが、

「お父さんたちだって会社で働いてくたびれるもの、いいじゃない休んだって」と口をとがらせると、

「そんな子どもだけは、幼稚園ありにすればねえ」と弘君は明男君とうなずき合っています。

思いがけない問題に、私はどうまとめようか、やすお君になんとわからせようかと考えていると、

「だって、おとながお休みなら、ねぼうしたり、ごはんが朝とお昼、どいっしょだから、幼稚園や学校にこられないからじゃない」と、かず代ちゃんが言います。「おべんどうもつくれないしね」とえみ子

ちゃんがうけとめると、利明君が、

「そんなら、パンと牛乳をおかねもらって買って来れば、朝だって、パンかって食べればいいよ」と幼稚園好きな休みのきらいな子らしい意見をだしたのです。

どうやら、子どもたちは親の答えを、ごほうびと休みという代償にしか理解できなかったのですね。

私は、三日の日の朝刊を取り、文化の日の記事をわかりやすく読んで聞かせました。そして、みんなのためになることを考えたりしたりした人に、どうもありがとうと感謝する日で、みんなも、いいことを考えましようという記念日であることを説明したのです。

#### △歴史的な文化の日▽

敗戦後改められた国民の祝日、明治天皇の治蹟を崇敬してできた天長節を昭和二年に天皇自ら、明治節と改め、明治の御代を追憶しようとしたもの、今日の文化日本を築いた明治天皇の恩顧を忘れぬための感謝の日、

(年中行事 宮尾しげを)

を思い出して話していくと、

「考えた人にくんしょうあげて、しるしにおめんじょうくれるんだね」

「ぼくたちも、一しょうけんめい考えれば、おとなになればくんし

ようくれる？」と言うのです。

子どもでも、いいことを考えたり、したりした人の方が、みんなよろこばれ、うれしいと話し、今まで、だが、どんなよいことを考えたり、したりしたか、思い出してみることになりました。「友達の良いさをみとめ合い自分も皆のためになるように考えて行動できるように努力できるようになる」という目標に向かって、

・「直ちゃんさ、シジミを下におくと、ほこりが入ってしむ(死ぬ)から台作ろうって考えて、そしたらせんせんしま(死)なかったね」

・「こないだ皆が、折紙と、飛行機の紙つかいすぎするから、折紙当番と飛行機当番作ろうって、やすおくんがきめて、いい考えしたね。」

・「いわせさん、うさぎが寒いからって、うさぎのおふとん作ってやろうって考えたじゃない。」

・「道代ちゃん、みんなボタンなくして、先生にちょうだいちょうだいって言うからって、きれいな箱持って来て、入ればしょきめたね、これだっという考えだよ、みんなそこからとれるもの」

・「えんそくのくず入れぶくろもいいかんがえだね」

・「はまの君、牛乳のふた取るやつ、あぶないって、かぶせるものと、ひっかけるの、考えた」

と活発に話し合えたのです。

そして、利明君が、「ぼくらも、くん章作ろうよ」と言ったので私が、

「それなら良い子のくんしょうにしましょう」とつけ加えると、うん作る作る、ともう材料戸だなにはしりかけたのです。がこの日は土曜日だったので、月曜日に作ることを約束して打ち切り、月曜日の朝、牛乳のふた、折り紙、布などを切り、安全ピンをつけてそれぞれが作り出し、まず自分の胸につけ、あるいてみました。(「ホアンカンみただ」といっていた男の子もありました。)

それから、何か良い事をした人や、よろこばれることができた人は、自分の作ったよいこのくんしょうをつけることにきまったのです。

しかし、子どもたちの手製ですから、ノリがはがれたり、セロテープがはがれたり、やぶれたり、せつかくのもりあがりしがほみそうになったので、当番のしるしとちがうしるしを、私が毛糸で作り、それを、よい子のくん章にしました。それから今日まで、

「先生、ここにサポテンおくより、こっちの方が日がよくあたるよ」とか、

「このおもちや、こっちへおくほうが、この所が、きれいだよ」とほんのわずかの事がらにも、今まではるものに対しても、何かちがうことを、よいことを考えようと努力している子どもたちのすがたが、みられるようになったのです。

先ばいの先生方がお聞きになったら、「そんな事、あたりまえ」

とおっしゃるでしょう。でも、私は、ことばだけの説明しかしなかった(今まではおとな本位のあたえかたしかして、いなかった)国の祝日をほんのわずかでも、子どもと一しょに考えることのできたよろこびと、社会の行事に対する子ども、のぎもんが、子どもなりに社会を正しく理解していく芽を育ててくれたことを、すなおにみとめ、小さな成功に、よろこびをかんじるのです。

このよろこびを感じながら、おとなの、そして教師の仕向け方・展開の仕方、どんなむずかしいあつかいにくい教材でも、解決することができることを学びました。そして今までの、細切的保育・手おちだらけのあつかいを反省し、その事がらをかりて(手がかりに)どうしなくてはならないか、をよくよく考え、計画を立てなければ、次の時代を作る幼児を教育する資格はない、としみじみ反省させられました。

### 七五三

「先生、今日早く帰りたい」と道代ちゃんが言って来ました。

「どうして」ときくと、「帯買いに行くの」と目を細めてうっとり話します。そばにいた小夜子ちゃんが、

「あたし今、育ちざかりで、すぐ大きくなるから、一年生になって

やるんだもん」と言う、無口で自分から話すことの少ない久子ちゃん、

「あたし七五三でつかれるから、えんそくいかないの」と言いました。

(十周年記念行事があったため園外保育が前日の十一月十四日だった。)

道代は近よって来た靖子ちゃんに、「あなたお祝いやる?」と聞く、

「うん、洋服だよ、大きい小学生(高学年の意)になったらピアカうんだもん」と言う、と道代は、

「あたし、たんもの長い、お花のもようので、およめさんみたいにおしろいつけるんだよね」

と久子と肩を組んでたのしそうにしました。靖子は無言でその場をはなれ、小夜子もくるりと向きをかえて他の子も、遊び始めたのです。

私はこれを見て、千住だなあー 下町だなあー と思わず、子どもの顔をみてしまったのです。

こんな小さな時から、着物やリボン、おけしよの事をよろこび、みえを張って他人とくらべさせてよいのでしょうか?

女の子だから、下町だから、おとなのよろこびだから、おとな的に考えず、子どもなりに、さらっと考えればよい(よろこびの表現もして)と思いいおしてもみただですが、「七五三」のために、大

切な経験の園外保育まで、「疲れる」と休ませてしまっています。

となりの子より何千円高い着物だと親がみえを張っていることが、子どものことば、「となりの子は三つだけどね、赤札堂で買ったの、あそこは安いでしょ。あたしのは、浅草の着物屋で買って千円より大きいおきつで買ったんだよ」と言うのでもわかるのです。

#### △子どもたちの「七五三」の理解（一年保育年長）▽

〔4月～7月生れ〕

- ・ たんもの着物着て、ポックリはいておせんす持つ日。
  - ・ 一年生の前で、大きい着物作って着る日。
  - ・ お正月の着物を着てみる日。
  - ・ およめさんのれんしゅうする日。
  - ・ お祝のあめたべる日、ながいあめ。
  - ・ お宮でおまいりする日。
- 〔8月～11月生れ〕
- ・ きれいな着物をきること。
  - ・ お祝いすること。
  - ・ ひかわ神社にいいおまいりするの。
  - ・ 神社へいいお祝いのお酒のむこと。
  - ・ おまいりすること。
  - ・ 八百屋へいいビールをのむ。

（「なぜ、着物をきるの」と聞いたら）（この学級だけ）

- ・ お祝いだから。
- ・ きたないのだから。
- ・ お母さんが着なさいと言うから。
- ・ いいのだときれいだもの。
- ・ きたないと笑われちゃうから。

（「それじゃ七五三はみんながきれいな着物を着るの」と聞くと）

- ・ 学校にあがる前の子だけ。
- ・ 一年生になる子。
- ・ 一年生までの子ぜんぶ。
- ・ 小さい子ぜんぶ。
- ・ 赤ちゃんもだよ。
- ・ 赤ちゃんなんかうよ、あるける子だけ。
- ・ 小学校にあがる子だけよ——。

〔12月～3月生れ〕

- ・ きれいなおべをきておまいりするの。
- ・ 大きくなるように、っておまいりするの。
- ・ もう七五三だなど考えてお洋服買ってくれるの。
- ・ 先に生れた人がやるの。
- ・ おりこうさんになるようになっておがむの。

きれいな着物を着て神社におまいりする日であることは、どこの学級でも理解しているのですが、なぜそうするか、はわかっていな

いのです。

△それでは、おとなの理解は▽

- ・神社にいいおべべ、みせにいく日だつて。
- ・しんせきにきものみてもらいにいく日だつて、そして学校にいくじゅんびだつて。
- ・病氣しないでそだつようにかみさまのおさけもらいにいく日だつて。

- ・かみさまに良い子になるようになって、たのみにいくのに、きたないきものじゃバチあたるから、いいきものでたのみにいくんだよ。

これでもわかるように、おとなは良い子に、元気になるようにとわかっていても、子どもに対する理解のさせ方のあいまいさ、おとなが行事をいかに表面的に形式だけをおっているかがわかりますね。

おとなのみえ、おとなのまんぞく感(子どもに対する一つの義務をはたしたという)のために、子どもたちは小さい体を、じゅばんだのおびだので、ギリギリと体をしばりつけ、しめつけ、頭の上じやまなりボン、胸の中にハコセコ、そして、あるきにくい高すぎるポックリ、或いは、はなおのきついぞうりをはかさされ、くたびれても、ねむくなつても、ぐるぐる親せきを連れまわされるのです。

そのよく日、子どもたちは、

・先生、七五三で、くたびれるね、帯がきつくてやんなっちゃった。

・おしっこしたくても、よくできないからやだね。

・足のふくらんだとこが、まだつっぱってる。

・よごすな、よごすなうるさいの。

・お正月にきるときは大きな帯やめてもらうんだわ。

・いろんな親せきでおこづかいもらつて二千三百円たまっちゃった。

と言うのです。

子どもにとって苦しい一日だったようです。

#### △歴史的な七五三▽

昔は陰暦11月中の吉日をえらぶことで、15日に限っていなかった。

元来七歳の男の子の初めて袴をつける袴着祝、これに三歳の髪上げ式の髪置、五歳の女子の初めての帔衣をかぶせる式。

または、五歳・七歳の帯解祝が一般になり、七五三の子をまとめて土地の産土(うぶすな)におまいりさせ、子どもらの福運と、寿の長からんことを願う祝うようになった。

それが時代の服装もまじって来てしまっている。また、

「まなの祝ということが属していた。まな、とは、魚味のこと、魚肉を味わせることで子どもに魚肉を食べさせるのは三歳頃からが



一番身体のためによい、とされていた。魚はあぶらがあるので、三歳以下の子に食べさせると、子どもの体にある火気を盛んにするので、胃の故障がおこりやすく、七五三の日あたりがちょうどよい時期ということでご食べ始めをさせた。」

(年中行事 宮尾しげを)

(なお、行事事典にも、ちとせあめの事は書いてなかった。)

これを見ても、昔の人の方が、子どもの体と、心を、しんけんに考えていたことがわかるのです。

幼稚園では今まで、どうあつたかってきたでしょうか。

山の手の幼稚園ではあまりあつかわなくなりましたが、下町ではまだまだ昔のままを行なっているところが多いようです。

千とせあめの袋を作り、そのなかに赤白のあめを入れたり、ゾーリやゲタを作ってその中にバターボールやおかしを入れたりしておみやげにして持って帰るのです。

そして教師は、七五三をかりて製作させ、誕生会をかねたのだと合理化したつもりですましています。

そして、つけたしに、このあめは、元気なよい子になるお祝のあめよ、と説明して終ってしまうのです。

私は、七五三の行事こそ、幼稚園でことさら取り上げなくともよい行事ではないかと思うのです。

この行事こそ、家庭で親子が、静かに、子どもの成長をよろこび

合うためのものではないでしょうか。もし、むりに幼稚園で取り上げるとすれば、三歳、五歳、七歳と七五三に関係のある子どもたちを中心に、子どもたちのよろこぶ、フォークダンスでもして、たのしく祝い合ってはどうか。

そこで、私達教師は、父兄会や母の会などで母親と一しょに、どのように七五三を祝ったらよいか、話し合い考え合う必要を強くかんじるのです。

たんものおべでなく、あるきにくいぼっくりでなく、もっともつと元気に大きくなるような、動きやすい、お母さんの手作りの洋服の方が、どんなに意味があり、子どもの心につよのこるかを、そして、病気でやすみがちだった子には、ナワトビやまりなげ、バドミントンをしたりして、戸外で元気に遊び相手になってあげ、「今日はあなたの七五三のお祝いなのよ」と、お頭つきのお魚で家族そろって夕食をたのしむようにしたら、七五三の本当の意味が生きているのではないかと思うのですが。

日本の一つの特質である行事を、もっと子どものためになるような生きた育てかたをしたいものです。

(足立区立関屋幼稚園)